



諸國

東遊記

五

特別
3983
5





たくちりくくアアアアアアも賞祝なり一故に系於大坂也
 一送りのやまも半稀あり彼地より竹六七月の比
 盛よ生るるを大なるに秋田城下より十里斗隔
 長六丈人より及いふくも年血に流るる程なりこの秋田
 校より山々の山はけおはれと云実よを園ふは
 二月迄一切のまきふいすも石出の端の端もまき
 入るる一も半法もかからぬ秋田は限り仙
 草至南郡津控松前之藪皆大なる就中板巻地

一入りて馬とくく付もまきに落の山も金華のど
 く須くくも覆へりかすくもゆもまき人か人向る
 のもの多し一も秋田津控迄極く此地はまき
 竹なくも外は草及もも多きもの多し一も
 中山のどくくもわりの比只虎杖馬渡車前州播磨
 仙臺藪も甚多し一も肥丈一も山くく人さ
 るもの多し目致もせり又熊巻も多し一も深山に竹
 是に彼地より根曲り竹と云板巻地より一もヤコ
 タシと云板巻もあはれ大のくくゆくく長八丈人ぬ

とこも杖^{つゑ}程^{ほど}あるものなり奥州^{おくしゅう}の内^{うち}より^{より}きき^き紙^{かみ}を
とらり^{とら}り^りき^きき^きの^のへ^へ帳^{ちやう}夾^か紙^{かみ}より^{より}き^きき^きの^のへ^へ紙^{かみ}を
き^きき^きの^のへ^へ紙^{かみ}を
と我^{われ}又^{また}とら^らり^りき^きき^きの^のへ^へ紙^{かみ}を
か^から^らり^りき^きき^きの^のへ^へ紙^{かみ}を

朱谷

奥州^{おくしゅう}は^は短^{たん}の^の外^{がい}が^が淡^{たん}と^と平^{へい}鏡^{きやう}と^とよ^よふ^ふあ^あけ^けふ^ふの^の小^{せう}
よ^よあ^あり^り巖^{がん}石^{せき}海^{かい}と^と突^つ出^{しゅ}と^とふ^ふあ^あり^り巖^{がん}石^{せき}と^と石^{せき}の^の氣^きと
い^いふ^ふと^と淡^{たん}越^{てつ}と^と竹^{ちく}竹^{ちく}は^は朱^{しゆ}谷^こあり^り山^{さん}と^と海^{かい}

とら^らり^りき^きき^きの^のへ^へ紙^{かみ}を
谷^{たに}注^つお^おり^り朱^{しゆ}色^{しき}を^をか^かり^りお^おり^り色^{しき}を^をか^かり^りと^と赤^{あか}く
め^めと^とし^しる^るお^おの^の朝^{あさ}日^ひは^は映^{えい}す^する^るい^いん^ん越^{てつ}と^と花^{はな}や^やう
と^と目^めさ^さし^しる^るお^おの^の地^ちは^はお^おの^の海^{かい}の^の小^{せう}石^{せき}ま
と^と多^たく^く朱^{しゆ}色^{しき}を^をか^かり^りけ^け遠^{とほ}の^のあ^あり^りの^の魚^{いし}は^は皆^{みな}赤^{あか}く
と^とお^おの^の谷^{たに}に^にあ^ある^るお^おの^の朱^{しゆ}色^{しき}を^をか^かり^りと^と海^{かい}中^{ちゆう}の^の魚^{いし}
或^{ある}は^は石^{いし}ま^まが^がも^も朱^{しゆ}色^{しき}を^をか^かり^りと^と身^み性^{じやう}有^あり^りと^とも^もり
是^{こゝ}に^に感^{かん}と^とし^しる^る中^{ちゆう}に^にあ^ある^る余^{あま}も^もあ^あり^りと^と海^{かい}中^{ちゆう}の^の魚^{いし}
小^{せう}谷^{たに}に^にあ^ある^る奥^{おく}州^{しゅう}に^に入^いり^りと^と朱^{しゆ}色^{しき}を^をか^かり^り

土と埒のくく入るにそを金とあざやっかん丈もある
 朱石は打碑き少く油うへぬる具石乾る時朱
 を少くまこありて并物の金のごくけ谷の入
 にお小柵ありて人往入る事と禁どもある人あり
 て領主の益とせしむる事かろくが卯の年
 の饑饉よ外が復りけくましくけあつた人往
 のらうらもいふ程のさうく事ぶつた人もあけ
 じは又盗みある人も多し余り拵ひしハ僅よ三年
 の後かろくが柵も破れてさる人多く通路自

けありよき時席よあつてもいふ極よ
 の朱砂辰砂よき及び人も多しよあり
 いざうらの益なりんく

化石溪

越前國大野領分の山中お波村とよふふよ
 とも石も化石も谷あり余波地よ拵ん
 うどもお名極月かりく通路雪よ閉ら
 る事ありた甚遠の人よかくく同よ大
 野の城小く山道九里よ細き谷川ありそ

大行院たいぎやういんより修験道しゆげんどうを催もよほすの教しやう字あざな人ひと派は名なと
 なる定さだまりけ山の縁えん死しとゆけハ人皇にんわう四十代しじゅうよんたいのころ
 と天武てんむ天皇てんわうの初はつ白鳳はくほう年ねん号ごう役行者やくぎやうじやうの南基なんきとて蒼あお
 宿魂しゆくこん神かみ初はつ清きよの地ちあり世よ山のやまののまきまきししは大池おほいけあり
 大沼おほいけと名ななりく是こゝろ池いけの般大はんたいの字あざなは累かさね加かとてと
 あり名ななりしとやけ池いけ小茅こまう妙たへののまきまきあり世よ間ま
 未いま昔むかし有ある身み半はんなりともかゝる僻へんをの地ちあり故こゝ
 存ぞん入にる人ひとも稀まじくこそ知る者しるものすくなくいふなりと
 ぞし小池こいけの中なかは六十むそ六ろくの嶋しまありしを時とき討うつ小こ

孝敬画



水面と持ちを時の教六十六より日本成然の形相
いふ其昔の基菩薩も此証よまじ実方中おもは浮信
と又物一信いしや実方持ひ多し一財

四つの海波静あるまじしやまの是れ信て出る信り
係まらしいしといひ信ふ証の如くよ古松二株あり一
と実方中おもは信え松といふ実方信松よ信りて信成
又多しししを時四神威意ありし信ありとまじし
松の根まがたぎぎと一株の松成信と松といふ信
たし沈の岩よ川なり流の中よんぬる中よりそ果木

ると奥州時と多たしく生條の信も皆ふ、又ありし
ど今ハまぎまぎして何まといふとまじしとらく信一
沈の中へ実出する岩根と芦系信といふは鳴むら動
と音より回し一亦あり又沈の命ふのよ右の方よ
もて信いしるもまきまの標のまきりのあり是れ信
本と名付し天下の吉凶成ふしや信しる時を天下
を平の家から信しるもまきまの標のまきりのあり是れ信
う持びしは五月上旬のすかりしが信信のまきり
ハ大はたむのまきりしと信し十日沈信はまきり

水田並に青く水際より芦荻生ひ茂りゆく
 之山原く人跡絶たる土境あるにこそおぼしく梅を
 世介の思ひと親せり宿友のまがねどけ遠海山を
 氣強き世が藤山吹籬踏をとおきり般に
 身の勢まきくのでやあるに公なくこそ今や時々の
 生るりと目もたまわて極枯りれども水田は只一人
 斗と七八斗の小物うのそ有りてこそ初くるも
 かくかよ時々のねく有るやうにも又えん日暮くとき
 守り在れどもこそとふきりもがけ
 子日教も西山

小畑きくまの樹は若く雪はる峯はゆるい
 すぐくありゆく福は夜一々大竹院はゆるぬ
 待たく時拵じとねくあじくまと同小お
 もきりくつふまを至信日よよりて拵いありぬ
 一もまきくは遠年く又の日はやぬ
 増ぬいと時拵はゆるふはる
 一もまきくはゆるく一もまきくはゆるく
 よソいかりく人と迷りくむる世に多れあひ
 公池の不思議も其まきくはゆるく

て夜ハ砂より其根日記出く入るは天を射り
かぶらうよくまぐ小やじへき如地七せざれは船とく
うり登のこくけふや成懐さくはふは海自注り
原こくせひさふたはとも入をりんと例乃ニ丈
の松のむに算其結しは法の面とを波しはるにきめ
ふ入らし二つの小海アえはこは情しはるふても初け
いこやとやれ舟しく出るまくの夜ふたど口ま
こ結くる程よこまこの岩根がし初くやふ入る
よせさむばしと目もたあをた泳持るに一つの詩と

わきて浮しをつ群は池の中よこまは泳くま
いと月さぬし又志げしうらま向ふの岩根とあしを
てまきくよ浮くまをわくまこくはるはるはるは
の中よおくの舟出来て揺りけ舟すまはあまら
舟は看くい出さうどく目もを初きをほしさいえん
うらま中よは奥州崎しそまやまこ二こ丈舞あも
及びくいと大まき其鳩のこまを小松生い高の夜を
うらまけくじよまを争いふさう浮く出く揺りま
は不思議といふもあまらあり面白く流りあくとやうな

るふら時止に岸より竹もあらぬ右より参りたる御ま
 公けまよはず又於り物ある時先きの時よりある
 子のあかしの櫻の押りまきし花のよく先きの時
 のつらつら情よふけりけりけりけりけりけりけり
 るさゆらの後日る居るもあつたやまといふことあり
 まらみまきふつらねの大江院の海なるる傍も浮きと
 又さるるごとく笑しし浮きのあかしの花をさるる
 見はれぬしとてあるよは戸の縁人にはみ陽殿山を
 山しる海なるるは浮きも是物せんとしてあつたよは

のふのしと竹のしと相々してあはれいへりといふが
 いさぐ御身もあらぬ又月夜しとあはれは流し
 ありて又これにそのふりぬの海もあつたなり流し
 むらりや浮きあかしの花のよく先きの時よりある
 竹のトヤウとてあつたなりとりのく竹のあつた
 どきり小初くつきもあつたなりは諸人大きよ遠屋
 いさぐ御身もあらぬ又月夜しとあはれは流し
 なれぬしと竹のしと相々してあはれいへりといふが
 かつらも

大骨 たいこつ

余よの奥州おくしゅうは北きたに南郷なんがうの内うち又古いにしへは這わたりの海うみに
ある大風たいふうの聖せい日にち人の足あしむらり也なりさみち人ひとむらりな
る肉にくはたゞちふがう核かくもいさゞも今いまふゝるる流ながまを
くらひ姑ななより魚いさな乾かすてんふ小人の足あしはね遠とほくはす
むらぐ大かするものぞして民たみあゝり社やしろ人ひと無なかる様よう一ひとと
そ邊そばまゝの瓦かへははりぬ余よをすけて考かんがふるに南みな軍ぐん
田村たむらの大骨たいこつとつひをかよも村里むらの氏姓うぢぎたゞいま
里さととつ休やす休やす格かくる大かする骨こつかどあり又また古塚ふるさかなど

と南みな軍ぐんより大だいある骨こつと塚さか出でせし奥州おくしゅう遠とほくは
むくむくやありる小こ小こは遠とほくはむらりるついでゆゑにや
奥州おくしゅうよりハかゝる骨こつ液えき液えき種しゅ乃なり既すで又また田た系けいの又また布ふ
類るいちど其その外ほか性せい古この鬼おに神かみの骨こつかゝりつひをせせ
くさひをいさするをともあるトむらりの人ひと
ともく社やしろ人ひとよりりるはちり社やしろ人ひとよりりるは
大かするはたゞちふがう核かくもいさゞも今いまふゝるる流ながまを
日本にっぽんの東あづまの方かた穀こく子こ万マン里リの介かは巴へ大だい温おんとつふまあり信しん
り大だい人じんふとくを國くにの人ひとハ長ながく教くわ文ぶんよむびらり年とし所ところ素す

院人請回とまがりしついで彼にありあてまらんが
 高き浪はあがりえるに沙京は足跡ありそ記教人は
 て人間のしつとあがりしついであましく近留まらうと
 ありもあり又王國は漂流せし人はひまわりしついで
 とも見えなれど日なのあるはあがりて大人國ありて其
 小の人の身はしつとまがりしついであましく近留まらうと
 遠くより大骨おあげて西國の國をさぐるにたれは必
 彼巴大温乃國の人漁人あがりの舟の覆りて海中に死せ
 一骨の首も大風をよむ本の事海流はまがりしついで

あがりしついであましく近留まらうと
 受りしついであましく近留まらうと
 大波浪小足のもお切りまがりて大風をよむ本の事海流は
 流をせまがりしついであましく近留まらうと
 云人身とりあましく近留まらうと
 只格別よ大しついであましく近留まらうと
 そまの通活あけけけしついであましく近留まらうと
 ところまの流しついであましく近留まらうと
 のまの通活あけけけしついであましく近留まらうと

金山

奥州金山山より日本に黄金の初出を記す

この山を賦とししとき、千代に及ぶ地又日本東方の隅に

ありて景色至妙の地實に仙境ともいふべし仙居とい

ふは方小島海廻船の入る大湊なり石の巻とのふ所

船乗華の地なりその石巻の湊はとりよあり故と傳ひ

山小島なり大なる澤と知えり程十餘里ありて山

ふよりよきと云ふ船渡りの山家あり金山山といふを

是れ金山山の海に石巻と云ふは石巻の海に石巻と云ふ



東洋圖

さしきほしめしむるに水とてしるはるるに
三千斗しる向ふの山も小なるやまもさしきほしめしむるに
山も浪もさしきほしめしむるに水とてしるはるるに
あまの山にさしきほしめしむるに水とてしるはるるに
浪いさるるにさしきほしめしむるに水とてしるはるるに
解かるる日ハ大波とてしるはるるに水とてしるはるるに
る日ハ大波とてしるはるるに水とてしるはるるに
さしきほしめしむるに水とてしるはるるに
ハを浪はさしきほしめしむるに水とてしるはるるに

いさかきまの丈夫なる公の者もさしきほしめしむるに
ハ寺院一字ありて天孫居るの山あり絶頂より
ハ下ししふ時をさしきほしめしむるに水とてしるはるるに
寺とてしるはるるに水とてしるはるるに
アヤとてしるはるるに水とてしるはるるに
廻りも教すまのさしきほしめしむるに水とてしるはるるに
月もさしきほしめしむるに水とてしるはるるに
の松自然にさしきほしめしむるに水とてしるはるるに
ぶり人化して送るカサるるに水とてしるはるるに

小山中皆黄金なるものありしは昔にさうやくも海砂皆金
 色に光り波に映しけりしものなり山中も岩石も黄金
 味しく通流せりも皆金色なる物況の黄金と称
 くし海砂もつらつら積人たききりし物と稱す又
 物事は船よりあつしする時に山中にさうやくも
 草鞋と称す船よりあつしするものも草鞋と稱す砂
 金我陸地は海にまじりて砂の身はゆきゆきけ遠の海
 へまじり海苔私布辰自菜のたしとてまじり海辺の民
 是とてわろく産業とて又海産とせしは海はまじり

海産に金砂と稱すなりそ金海産と稱すは
 海産なるが万邦は皆く人皆海産を以て東にまじり
 七美の金海産はまじりては海産を以て海産と稱す
 船産の産より少くは海産なりは海産にまじりて
 正東にありて海中に産するものなりは日中の東の極と
 して南極津波の地方に豊産の突るは七美なる
 海産にまじりては海産と稱すなりは海産にまじりて
 海産にまじりては海産と稱すなりは海産にまじりて
 海産にまじりては海産と稱すなりは海産にまじりて
 海産にまじりては海産と稱すなりは海産にまじりて

出る火のふとも丈ありて大石の程の圍炉裏のあり
 角ありき挽臼と名あり其挽臼の穴は蓋は柄
 籠の竹とを尺餘は切りくさし込めり其竹の尺
 丈の火とありて觸るるに思は竹の中より火出
 右の井の先より出る又強く吹消せば歸るあり
 且大石の穴火の下に長く置て人より始りて竹
 の筒にまきくもくくハニニ百目の襦襦とありせること
 く光明を注ぐけ火あるを名をなちまの家は火
 より油火の石圍炉内隈にまきくもくく挽臼に

差込をきく竹は續げは火何方近もゆきくこと
 るしききく氷のくくを後右へりのせてる石を
 方のもありかへ風の浅きとあり竹と續きく道す
 けぎきくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
 懐中にもあり印矩と名あり件は火をけりて
 右の火のくく印矩かへけりてけりてゆきの日のの
 彼の種は中けけりて印矩はゆきの其音はいつのそ
 ろりかきめりてと名は正保二年酉之月けりて
 ぬいごと吹くもくもくもくもくもくもくもくもくもく

今天明六年丙午の年よりあり百四十二年の一日迄
 ともかくおぼえ初めおし時は換日とふせしるべき
 ともかくおぼえ池のてしもあべまやとをいへば家
 ともかくおぼえ清などある時といへば換日と初め
 といへば換日はお代なるは家の油火を用ひしるはく文
 おりの物とハ糞或ハ焼もも事足りて大なる事
 ソビエー又ハ如法を村より十里あり東山ガラキ村
 といふまゝのけいもあべまやといふ余ハ如法を村より
 又さらし其カニキ村ハ約のけいもあべまや

ともかくおぼえあべまやといふ火井と名なりといふ日
 ともかくおぼえ池のてしもあべまやといふ火井と名なり
 一臭水の油ハ芝田の城下より六里あり東山ガラキ村
 村ありとも名川の東南五丁より二里あり東山ガラキ村
 小瀬名川といふ小川ありとも名川縮小といふ名ありとも
 松林ありとも名所といふ池ありとも名池といふ池ありとも
 其油のてしもあべまやといふ余ハ入口のふし
 つ成る池のてしもあべまやといふ池ありとも名池といふ池ありとも
 ともかくおぼえ大なる池ありとも名池といふ池ありとも

水の中へ油を注ぐと水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ
 色を注ぐと水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ
 少くとも水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ
 池と銀と水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ
 カグと水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ
 やと水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ
 油の魚と水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ
 故と水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ
 油の魚と水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ水の中へ油は入らぬ

此の油の味は... 油の出る... 山林... 人の... 水の中へ...
 此の油の味は... 油の出る... 山林... 人の... 水の中へ...
 此の油の味は... 油の出る... 山林... 人の... 水の中へ...
 此の油の味は... 油の出る... 山林... 人の... 水の中へ...
 此の油の味は... 油の出る... 山林... 人の... 水の中へ...
 此の油の味は... 油の出る... 山林... 人の... 水の中へ...
 此の油の味は... 油の出る... 山林... 人の... 水の中へ...
 此の油の味は... 油の出る... 山林... 人の... 水の中へ...
 此の油の味は... 油の出る... 山林... 人の... 水の中へ...
 此の油の味は... 油の出る... 山林... 人の... 水の中へ...

白草ふり子との、類とすゆ其神と夏のるふ多く刈
字とすくをよ用ひとす

一孫軸とりふこあり是は越後の中よりつもの下も
おまゐるもや老少男女の産所なく而部又足持と
太刀も切りもどくふのきこ切も本々一城の大小宮
に或ハ照之或ハ撲くく思ふよこもかたりさも骨の
切くもかき又格別血乃出くもりふもあはれ只宮
恐遠く奔り時夜傷をのどくも所其地は信長
く吉と暦と玉焼くもさゆもて用ひふ数日のるふ平

愈一城の注もアを尻かなるもりふは孫軸も五人を
事或ハ何方の境又バがしこのはたも其下大抵にさる
るもの注もども何れもさるとりふも知もはは
波り陽くず奥州出相佐渡ぶどよもありといハ北地
陰多の障毒人よあさるもやとりふ又或人の説も
孫軸よいあはれはか身あかありは毒のともさなるも
を力と捕へく切もどくたさるゆえよりやと是ハ備説
おりの只深きやもさくむうもりふさひありり
各もあさる一廣大和奉草ぶどよハ漢者も考へ

出せりさるるの山

一 波の題目とるき寺泊りの海平よりありむり日蓮上人法流配流の時海と小書ありし妙法蓮華經の文字入りは法華信公の人船よりありし其所よあり波の題目ありしとあり

一 道徳行はむり想考と人は因配流の時携へありし杖とさるるに地よさく我流の法世に引くは杖の行ありはるへりし直なりし其杖さるるに杖葉あり其後を根よせしむる亦の竹皆道徳行

一 今ハ其古跡の鳥居野とりふありはり
一 八ツ房の梅は文田より断あり一ツの屋よ花実ハツ
一 石男候ののりしやせにをき以ハ屋論梅
一 上方中よりありぬ是等とありすくセ石男候
一 之は作公よと度要として一よと度寧のる衆あり又
一 撃あぎ樵とて親書より系よけなきはあひし樵の
一 体とていふよかやの実よ糸の遠りし定
一 又セツ坊よりハツ流とてハツ好とてハツ流あり
一 又セツ坊よりハツ流とてハツ好とてハツ流あり

一ハささふ知りた大極子倍のりひ使りしと毒海を
辨しきし

一弘智法印の遺骸云奇物なり信子（持物）聞
帳より方々又東奥記よりもくくくくくくくくくく
眩之印板よりくくくくくくくくくくくくくくくく

東遊記卷之五終

東遊記卷之五

平泉

奥州平泉はむ奥羽三州乃太守鎮守府お軍秀衡
父祖三代居位の古城跡なり仙臺の津より
二千四里餘北の方よりく前よ北上川衣川と更け
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
秀衡清衡お建させ。中尊寺今小存在し
昔の作すのあよりよ又くありきし山我園也
いふ禁乃街道よ昔園所ありく長く園とわたり

けあし山と園山とのく中まわりの山
遠り里が今より七上長五長とのく
この里に流る川の中は長川の
園所の中は長川の園所の中
り七山より入りくあり又義経の
よけ園山より下りて終に街道
てあつく中より今の城郭おろ
りも山より入りくあり又義経の
よけ園山より下りて終に街道
てあつく中より今の城郭おろ
りも山より入りくあり又義経の
よけ園山より下りて終に街道
てあつく中より今の城郭おろ

只此村義経の行 居る所の
茂りて、芭蕉乃冬白
木、之節、穴、坊、坊、坊、坊
うき、穴、坊、坊、坊、坊、坊
少く、穴、坊、坊、坊、坊、坊
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一
く、穴、坊、坊、坊、坊、坊、坊、坊
く、穴、坊、坊、坊、坊、坊、坊、坊
く、穴、坊、坊、坊、坊、坊、坊、坊
く、穴、坊、坊、坊、坊、坊、坊、坊

幾つなり又東北乃方よりくろくはきりし松山之西の
 のつとせむきう 松山に松を去那のにおにあらま
 くとるを山のむりむり松多きりし今もそよの
 いあしに余り来とゆる所。法名は長春陸奥より止し
 福ふとく 櫻多き山よりとらる花の法もふ必は
 下くとく 一とく和舟かどおとる是れ奥州地を入
 りとくふ日く日く東をくましくけふふくはは
 とあきく ちとふく一とくは 昔思のむく
 例ら撫れかどは松をきりし中尊寺に法名

松山に松を去那のにおにあらま
 くとるを山のむりむり松多きりし今もそよの
 いあしに余り来とゆる所。法名は長春陸奥より止し
 福ふとく 櫻多き山よりとらる花の法もふ必は
 下くとく 一とく和舟かどおとる是れ奥州地を入
 りとくふ日く日く東をくましくけふふくはは
 とあきく ちとふく一とくは 昔思のむく
 例ら撫れかどは松をきりし中尊寺に法名

文の草形ハ右系也又教光朝臣清書ハ冷泉中納言朝隆あさたかより人々よ侍の什物しつものに依り世々右天將朝朝の師教書又北條相摸あきまより貞時さだとき山富中納言やまとみ顯あきこ郎らう浅野あさの彈正少弼長政たけなが豊后ぶんご阿曾あそ次公つぎこう等乃文書教ぶんしょ教くわうより人々よ侍の什物しつものに依り世々右の堂塔伽藍たがらん建武四年けんぶ回録かいりくして終つひに經系けいぎ一系いつけい金色堂きんしきだう一宇いつうと抄せうせり是も早せい敷しき之の夏なつ移うつり修しゆ破ぱ壞わいより乃のひひ一いつ成せい百八十餘年ひやくしじゅうじゅうにゅうねんの役やくより少せう正せい徳とく元年ねん鎌倉將軍かまくらげんじゆん惟康いかう親王しんおう歿がくより公こう山さん將しやう貞時さだときに命いのちと

此二つの堂このふたつのだうも又また勾かぎの形かたちに似にたり修しゆしの堂だうと造つくり風かぜぬと避よそけ修しゆ言ごんと加かへして先まづあら其その後のち今いまにあり時とき乃の圓まとまり代しろにに雲くものの堂だうと修しゆ理りして風かぜぬと防かきぐけて止どまするようまりにに後のち衛ゑい建けん立たはた金色堂きんしきだう並ならびに經系けいぎ教くわう終つひに修しゆ了りやうむすのの修しゆりの修しゆ中ちゆう今いまもも色いろをを畫ゑひてははけの外がひもも修しゆ了りやうるる日光にっこう山さん外がひ世よ間まををははははままききりの稀うむむししぐぐ布のぎぎせせめめくく厚あつくく漆しやくぬぬりり目めととよよ今いまもも酒さけとと押おしてして堂だう中ちゆう一いつ極ごくのの金きん色しきががりり長なが押おのの地ち紋もんもも細こ細こ珠たまももととししくくああ守まも檀だん四し隅ぐのの様ようもも七しち寶ぼうとと似にくく在あららせせりり既すでにに六むく百ひやく也なり

と評くありて、（うら）細目と云ふは、（ま）法華の教換し、（ま）金箔
 も物なりとて、（うら）えりて法華下堂ありといふは、（ま）今ふたあり
 とかや、（うら）法華のて中堂のてを、（ま）阿彌陀觀音菩薩
（うら）の法華と云ふは、（ま）壇中と云ふは、（ま）人の指と他の中、（ま）清
（うら）浄丸の基壇、右の秀浄から、（ま）秀浄の指の側、（ま）和泉
（うら）三郎忠徳の首、（ま）相法細と云ふは、（ま）にありて、（ま）配中、（ま）法
（うら）浄の大治元年丙午七月十七日、（ま）逝去且其子、（ま）其基浄保
（うら）元二年丁酉二月十九日、（ま）逝去其子、（ま）秀浄又法二年
（うら）未十二月廿八日、（ま）逝去す、（ま）云々堂、（ま）細と云ふは、（ま）竹實教

（うら）多と申は、（ま）法華の細と云ふは、（ま）細紙と金泥根沈を
（うら）指書行書と云ふは、（ま）法華の一切經あり是を清浄存生の時自
（うら）在坊蓮光といへる傳と云ふは、（ま）一切經書あるの本と云ふは
（うら）一むと云ふは、（ま）同法書の傍數百人と招法して、（ま）供事し
（うら）是と云ふは、（ま）余七の經と現身で、（ま）其書本
（うら）指法正しく行法亦持あり、（ま）漢土に諸君ありて、（ま）等
（うら）しく書せしむるも中く是は、（ま）指と云ふは、（ま）法と云ふは
（うら）彼時日本もかどりの法書多あり、（ま）今世に誰一
（うら）人する者なきは、（ま）誠と歎息するも、（ま）法と云ふは、（ま）其後

四海義爭の本と據あるいふやうく文華地子隆と
 る能かきと一其くは不なるもいふ一教多き一切
 経より事あるはなうそまき事あるは二世も七世同
 出でまき事あるや経の教より時より世の
 教より世あるはなりそあるも亦古新ま一けかきも基
 縁納め一甜余金泥の楷書の一切経ののそを世
 間普通の径のそくく又亦縁の細く一そ宋板の折
 本一切経よりけかき玉軸の法華經より神小野道
 風の本縁よりそは余入るそとほよりけかきをいふ



義篤圖

又天台大師の影像一幅地ハ竹布とらふもの
 画も唐人より其君知りて讚ハ顔魯公の筆とい
 ふ是七當寺より一の寶物とて又そのを伴きた
 慈覺大師唐土より將事のものありと云ふ人金圍の
 画乃十三佛牧溪の觀音木村の寶物多し基衛
 も亦最佛法の淨依一色哉寺の隆寺嘉祥寺
 亦法送之に佛工運慶とて六六の茶師如來及
 び十二神將其他仙像若干と送ててあんとてま
 づ運慶より一使者とて賜りおす其品

一金百兩

一鷲羽

百尾

一七間間中經之水狗皮

六十枚

一安達絹

千匹

一希婦細布

貳千端

一糠部駿馬

五十疋

一白布

三千端

一信夫文字摺

千端

杉谷外は奥羽の產物政事とて
 送る運慶とて是と得て又奥州乃結納と稱
 是は使者ゆりくはゆとりひく其基衛又法信成
 之殿乃其は結納とて運慶は結納運慶は結納

件の仙像とはくり玉眼と入る二年の間に
細り奥列を送ると云傳像は玉眼と入る事付時よ
つと好ましく是等のもあても高時平泉の盛分
り一平たりひやぶ一秀衛は乃頼朝とたふあを
て居たりしもむご

是ゆけしおのふよ今の世後平のえあすもあて
そまよ依るる金銀も世の中よたごらんしありぬえ
伊平泉の盛分よりうく人右の傍およ今も終百あ
又そりおのおの多きよはり合り又後高坊南都

大佛殿建立の時も鎌倉の事附終は金五十
と伊平り今もあて事此所人の分限もも金万
金の事附ともよのまごうたきまは今の世後金銀
もはゆきよはづゆく小もごらつ時ハ昔よりきこ
くふ

三尊堂

伊豆國と駿河相摸の二國よとて毎の相根
直海中二十五里出流りてそまかり故よつるの祠
をばくま号しすそと志摩よまの溪よりけ國

の下田の湊より七十五里の海と遠州灘と行り
 日本第一の大洋 以下下田より西の方には石浦と京
 下川の定より奇島の嶽宮あり山の辰巳は向いて指
 知るゝ知海はあつて岩屋の口狭り此の潮高き時ハ
 舟と入るゝ一有よけ嶽宮は北ぶ者潮はあつて
 嶽宮のあつて是出る時と考ふも一有よけ嶽宮
 五月の卯は北は北び一有よけ嶽宮は北ぶ者潮はあつて
 一有よけ嶽宮と入るを潮と考ふて十五日より一有よけ嶽宮
 十五日より嶽宮の宮中より北び一有よけ嶽宮は北ぶ者潮はあつて

一有よけ嶽宮は北ぶ者潮はあつて
 一有よけ嶽宮と入るを潮と考ふて十五日より一有よけ嶽宮
 十五日より嶽宮の宮中より北び一有よけ嶽宮は北ぶ者潮はあつて

ぬハ七八十ヨリハ世々云々多遊川梅の多様現出
 と遊よしうの事とさせ給ふ神に目出交ありと云に
 とか肝に後だそ不思議と事此端の乃ふあ一
 あらた舟政やぞ舟と出よふ柳多ハ根今一交おま
 んとうし後よ今いて喜ふんしう皆の内よ又初
 めのめやかりしうよも夫も不少しも遠はざりし初
 完しう知よ知しへるよ天日よとて正年よあり知て後
 同行の者よ同よ皆おこさる体相ハ目どりしども或ハ佛の
 所長と云ふ人ともさるもあり或ハ二尺三尺どりのたくと色く

又光剛の赫たるよあありよ多と遊もきくる者よ
 佛体と云くと又定よりしもあへしし根を深まの飲
 たりしものいふるよ思どしおりのよ佛のいふた岩は
 浪おらるとそと仏と雲霞ハ深き浪をくし是きとそ岩
 根ましく出さバ佛乃のいふた岩ありしよ思は佛又えそ
 究の内時ふかたるよこれ思三月節の江大瀬平の江
 去佛と云くおと岩根をくあつりしは佛よ治おるを
 西海のうかりしハ佛体をおあつりれく究の内時くうあり
 とそは法よ入る者仏はすは岩根よあつりしとそ

と探りて又さうもふさがる。仙傳もかく又それと又さ
つき形もかり、其岩根と少く思けは仙傳城、ふおま
とさせぬふさぎいつの法よりかゝる身先の道跡ありと向
あよま者ハ穴の中忍りて入る者かろりしら七八十
年以來探さる者ふと抱さむいかなごと探りて入しふ
人探ぬ穴のうちあは、巖爰は物ありしと、辰く奥深く
くくはひふ仙傳とをせしりて、け遠昔ハまの悪風
俗にそ人の公おさるりしりし、け仙傳とおと
り佛法とさうぐとたると知り自然よ人の公おさ

和ありかゝるも温厚は風俗と力せりと知る者
物信成りて西月手礼よある者先づ唱へてイナ甘茶
らふと云あうとささくおせくや、古刊で後いま
せふと、是と年取の祝言と此是といりかゝるにけと回
小イナ甘茶ハ海との要風ありけ風吹時をけ遠の者
とさるんもよ、和明と我ち或ハ背よ戸と直い火成
懸し、く遠道とけ、あす、味、ふ、船、難、風、ま、ま
とさるん、づき、湊、や、あ、る、し、う、後、と、あ、る、村、火、の、光、り
とさるん、人、家、や、あ、る、船、や、あ、る、と、知、る、あ、ま、は、海、底、の、岩

一船碎けく破船なるふ望船浦くより船と出し
 破破船せる若物道々ともあり揺むき船とせ今に
 船りても付途の古き家ハ天井板表方ともあり船の
 古板りて傷りよりかき悪風俗のなりも此俗の悪
 まよりく柔和なるよ愛しりるハ偉よ志平の徳化山
 の奥海のそくまごも及びくよき教のりよりより
 山名よつを付半余ヲ朋友壇面とつる人余よあし先
 達ちく禪僧の修行山ありの控親のおよ天下と優控
 せし日まはあよりえ及びて船りての後後埃隨ち



徳播東
 東園

徳播東

ふきかとはくろ福圓の弄才以まきし余も亦し是
 たりくおぼえりしが其人をきけりしに其の
 考りえぬくを無徳もあはる人もあるまじくならぬ
 うんちとてくくく今付書の中に二半と云くは
 のく因ふ余より一年大坂新屋所の人松皮屋作を流
 とりし者よずりて人弘法大略の旧作と云く四國通
 せく時小阿波小より土佐小よ廻るありしに新白の流と
 りの流あり新白の流と新白の時刻とてくくは其流
 よく流とるるより其流深山の谷谷なるに新白の

依新日東方よりゆく流の水は輝き映しけり流の
 中よ光明赫々として金色の不動の流なりあは
 時よく又もこの流なりてなるよみ依き流も
 て新くおぼえりしに其流の流ありきとて
 かつも其時刻は己刻に限りし信公流人のおぼえ
 たり人のおぼえりしに其流の流ありきとて
 のや流の流ありしに其流の流ありきとて

不食病

三河國巨海村天祥山長壽寺より其の

大伽藍たる鎌倉の右大将頼朝の息女是利義氏
 の嫁しつゝ義氏の室よりありしゆは義氏之別子封
 せしむらく西尾の孫任し吉良氏の如くせしむるは室後
 後崇光平法建之寺領とも是所せしむる則ち長
 壽寺あり給るに吉良氏衰敗より及びて寺も廢る聖處
 一今ハヤリく名のみ残りし一室の小屋小塔あり
 と云き一人乃屋傳ありし者其後供むるものあり
 け居し位も是年本願寺のありしとて寺あり
 人ありと云あり評判して是信傳の人群集は

交傳ありしは漫抄のありしと云わびくことあり
 是未傳しとて客傳と云る是色は少くもなま
 是身の内中人よりありしと云るは是は少
 づも中より傳面傳しとて是も少くもなま
 是ははやくも二十五年の断食處よりありしは
 かの伝より少食ありしが是も少くもなま
 ともは傳身ありしとて是は少くもなま
 は是より傳の少食ありしは是も少くもなま
 少くもなまありしは是も少くもなま

のちにかういふ事ありては、
今日せむも、やういふ事ありては、
うのいづく、食食カシ、
かういふ事ありては、
けし、
湯、
もあふ、
か、
氏と、

もあ、
おの、
昔の、
よ、
自、
あ、
あ、
不、

百人、
六

の傷を時後利後等のとき死せしむりつる後のた福
 と頼りしを念わりの時ふ必し食しむるものあり
 福後一奉もさくむるがたのどくも後にもは又あは
 及食ふものあり付福とては六米穀と忌嫌ひか
 き餅或いは蕎麥或は蕎麥まき等下もそのめだうと少
 づい言ひ酒を飲むと香気く味はよはる合せ
 さるものありとの怪しむるも又一は進合
 よりしをさくむるまきせども人もありそ外奇福怪福天下
 の用む程々の事ありく余も是存びするは是の我

本業のさうりも一よむと用ひしもの別る病
 のさうりもさくむるまきせども人もありそ外奇福怪福天下
 して話さうりもさくむるまきせども人もありそ外奇福怪福天下
 其書集し出さるる載るはあはるるせしむる
 金銀とむるるものあり十小八九は信づるは現るる
 阿まらうも一つの所字よは一人の優遊宴會飲食
 供通致修りし奇笑の笑談ありし係ふは奏
 聞は希奇特よはるる別るる神泉苑に任せ

小浜中 沙州の男女貴人等 群集して 信仰を以て 毎日の
 の後、諸國よりも 追々小浜参りて 参詣する 小浜中
 成程 参詣する者も 漸く 参詣する者も 漸く
 王の殿 参詣する者も 漸く 参詣する者も 漸く
 人々も 参詣する者も 漸く 参詣する者も 漸く
 あまの 参詣する者も 漸く 参詣する者も 漸く
 小浜中 参詣する者も 漸く 参詣する者も 漸く
 信仰も 参詣する者も 漸く 参詣する者も 漸く
 ともかく 参詣する者も 漸く 参詣する者も 漸く

小浜中 参詣する者も 漸く 参詣する者も 漸く
 ともかく 参詣する者も 漸く 参詣する者も 漸く

東旋記 卷之五

西遊記 二編

出來

東遊記 二編

出來

同 いりくみ 新集 三編

近彫

寛政七年卯八月

書林

京都寺町通松原下

勝村治右衛門

大坂心齋橋通安土町

吉田善藏

京都

須原屋茂兵衛

同 伊 八

山城屋佐兵衛

岡田屋嘉七

大坂

敦賀屋九兵衛

秋田屋太右衛門

京都

勝村治右衛門板

書肆

